

「はじめの一步」はどこから？

2017、4、16



先生たちの じめの一步は何かな？

会の若い先生たちが集まるサークルで、そんな話を考えてしました。

とてもお役にたてたようで光栄です。

それとは違って、1年生のクラスの最後に、レクで「だるまさんが転んだ」を

子どもたちがやりました。最高に楽しかった。

なぜって、校庭のスミとスミを使ってやったので、

最初は、動いているのが見えない、

だるまさんが転んだと言っているのが聞こえない、

それでもやっている不思議、そして楽しんでいる不思議、

彫像のように動かない不思議！！

さて、次は、35年間、私と子どもたちで作りに上げてきた

「いい先生になるため」、「楽しい教室になるため」の経験上の知恵。

それこそ「おばあさんの知恵袋！！」です。

「はじめの一步」はどこから？

☆白井春男さん(人間の歴史の授業を創る会代表)に教わったこと

「どんな子どもたちも、新学期は、希望を持って学校にやって来る。その期待にこたえるのが教師」

「どんな先生かな？友だちはいるかな？うまくクラスでやっていけるかな？学校は楽しいかな？そうして始業式に子どもたちはやって来る。登校する子どもたちの顔は期待で輝いているのを、いつも見てきた。

それが、何カ月もたつと下を向いて、元氣なく通っている子どもたちを見る。

その間に、何があったのだらうと思ってしまう。

新学期の子どもたちの輝く顔がずっと続くように、……

学校を楽しいところに……それが教師の仕事。」と白井さんは言った。



→ よーし、その期待にこたえてやろう。そう私は思って、新学期は必ずサプライズの楽しいことを考えた。

小学校でのその一つが、金平糖の星の「宝探し」 謎の暗号文を作り、校庭に星をばらまいた

(アルミホイルで)。次の学期に、子どもたちの方から私にサプライズ！！！！

小学校5年生の男の子が、暗号文と宝を持ってきた。ビックリ！！感激！！

子どもたちは、サプライズされるのも好きだし、自分たちがだれかにしてあげるのも好き。

中学生たちは、別れの時にサプライズを用意する。先生が感激して、涙を流して

くれるのを期待する。……でも、ごめんね、

年取ってくると水分が足りなくて、……涙が……出ない。

……でも、うれしいのです。



☆久津見宣子さん(人間の歴史:実践者)に教わったこと

**最初に言うことは三つ。クラスのルールとして、「私が絶対怒ることは三つです」……実演します
「人の体をきずつけること(人も自分も)。人の心を傷つけること。授業をじゃますること」**

実演「私の名前は優子で優しい子だから、いつもはとても優しく若くて美人な先生？？？！！だけど、……

コラ~~~~！！！！(大声) (びつくりした?) 三つの場合だけ、本気で怒ります」

例を出してくわしく、最初にそのクラスを持った時に説明します。クラスはこの原則があれば十分。この原則をもとにして、クラス全体を叱ることは、学期に1度あるかないか……。36年間こうして、一度も変わったことは無い。この原則は永久不変。

とても大事でとても役に立つことを教えてもらい金科玉条にしています。

実演続き「人の体を傷つけそうになった時、これは、もちろん友達も、大人、先生たちもそして自分もだよ。例えば、自分のこぶしを壁に叩きつけたり、腕を切って傷つける場合もあるけど、それも絶対だめ！

中学生は傷つけようと思わないで、事故を起こすこともある。

例えば、以前ニュースで、廊下で友達の上にどんどん乗っかっていって、一番下の子が息ができなくなって死んでしまったこともあるし、追いかけてっこをしていて、中学三年生、卒業直前の男の子が、ドアが開いていると勘違い



して、体育館のガラスの入口に突っ込んで、亡くなってしまったことがある。給食でパンを食べる競争をして、のどに詰まらせてしまって亡くなったこともある。

その子どもとてもかわいそうだし、まわりの家族がどんなに悲しんだらうと思うよね。でも、それだけではなくて、いっしょに遊んでいた友達たちも、その後何十年も心の傷を受けて、苦しんだと思う。楽しくて遊んでいたはずなのに、その遊びで友達を失うなんて、そのつらさは、どれだけだろう。あまりにも悲しいよ。だから、ちょっとしたことで、危険性があれば、私は怒る、それが当然の仕事なんだよ。

心を傷つけるというと、当然無視もダメ、人の口まねをしたり、変なあだ名で呼んだり、嫌がることをするのは全部だめ。当然だよ。

そして、私のことを、ババアとか、そういう呼び方もいけません。先生たちだって、されたら嫌なことがあるのは同じだよ。それから、自分のことを『どうせバカだから、俺なんて、やらなくてもいいんだ』っていうのもダメ。成長期なんだから、自分を大切に、力をつけないといけないし、それができる年齢なんだよ。だから『バカだから』の言い訳は無し。いいかな？

最後に、学校は勉強するところ、それが一番大事。だから、授業の邪魔はしちゃいけない。もし、邪魔をする人がいたら、『ぼくは勉強中なんだから、やめてくれないか、勉強したいんだよ！』って怒らなくちゃいけない。話しかけられたら、断らなくちゃいけない、私の仕事は、みんなを賢くする仕事だから、それをさせてもらわなくてはいけないんだよ。」



☆外間守正さん(超ベテランの先生)におそわったこと

子どもの心をつかまなくちゃだめだ。

思春期の子どもたちは、病気が後を引くこともあるので、具合が悪い時は休ませた方がいい。

そして、たよりにされるのがいい教師。

でも、完璧な教師はダメ。「抜けているあの先生よりはまし」と優越感を持たせる。

外間先生は、これしか言わなかったので、私流の解釈を……。

まず、子どもは言うことを聞く動物ではない……から、先生の言うことを聞かせようとしても意味がない。

言うことを聞く子どもを良い子ども、聞かない子を悪い子どもと分類しても、教師の仕事をしているわけではない。

中学校教師として、肝に銘じているのは、「子どもは言うことを聞かないものだ！！と、了解しておくこと。」

だから、脅しも命令も無駄。中学生なのに動物のようにしつけても、意味はない。

教師が子どもの心をつかめば、子どもたちは大声を出さなくても行動するようになる。

(…しかし、これができないんですね、私も。)

私の会得した教訓。心をつかむための大事な一つ。

どんな暴れん坊の子どもたちも、体が弱っている時には、心も弱っているから、優しくしてあげる。

子どもが「具合が悪い」と言った時には、必ず疑わずに、保健室に行ってよく休みなさいと声をかけるし、朝食を食べてきたか、食欲はあるかどうか、声をかける。

外間先生は、成長期の子どもたちの体には、大病が隠れていたり、その後、養生しないと悪化する場合もあるから、体は十分休ませることが大事と言っていた。

そうしてやさしくしてあげると、どんなに暴力で訴える子どもでも、先生の優しさは、覚えているものです。

「ほんとうに具合が悪いの？」と疑う気持ちは、胸の中にしまって、訴えを尊重すること。



心の問題ならば、よけいにそれが重要。教室にいることを無理強いして、教室で心ここに有らずの状態よりも、保健室で、保健の先生に話を聞いてもらうだけでも、十分なだから。訴えを尊重することが大事です。

たよりにされるといのは、困った時に、助けてもらえるということ。

子どもたちが「困った」と訴えてくるときには、必ずうやむやにせず、解決してあげること。それが信頼を勝ち得る第一歩。

たとえ、解決まで行かなくても、話を十分聞いてあげること。そして、教師(私)の側に非があれば、心から、心を込めて「ごめんなさい」「ごめんね」と謝ること。私は「気をつけ」をして頭を下げます。

子どもたちの心をつかむために → 私は、社会科の授業でがっしりつかんでる？かな
小学校の時にはたくさん楽しいことをした。
地球の歴史、草もちづくり、国語は「長靴下のピピピ」

心をつかむどころか、もし、「先生はひいきしている」とか、「俺たちを差別している」とか言われたら・・・



そんなこと、してないよとニコリ笑って、正面から否定する。そして、ユーモアたっぷりに、「あなたのこと大好きだよ、ごめん好きな伝わってなかった？じゃあ、特別に今度から優しくしてあげる」と宣言する。実際にはっきりとわかるように、実行する。その後5分くらいでも。(実際に私自身、子どもたちを嫌いになれない性格なので、実行は簡単) そう言われて笑わない子はいないし、「結構です。気持ち悪い」などと言いながらも、うれしそうにしない子はいない。そうやって心をつかむ・・・逆転ホームラン？

外間先生は、ダメ先生を装った。圧倒的な心理分析と心理操作を行いながら(私自身も一年間かけてだまされてしまって、チョー悔しい思いをした。「ほめごろし」にあっただのです。)、

さも「ダメ先生だから、私たちがしっかりしないとダメ」と、子どもたち自身が動き出していた。

外間先生のすごいところは、クラスに例外なく「外間先生よりは私はました」と優越感を持たせたこと。

私には外間先生のような自称「詐欺師」にはなれない。外間先生の手のひらの上で、好きなことを存分にして、笑顔でいる子どもたちのようには、育てられない。

だけど、子どもたちに優越感を持たせることは心がけた。

「先生はよくまちがえる」「先生はよく忘れる」「先生はよく説明中、かんでしまう(言い間違えの多さ)」・・・

でも、そうして私自身も楽になったのは確か。子どもたちとの距離も縮まった。私に寛容な子どもたちは、クラスの異端児たちにも優しくなった。



☆いじめ・クラス運営についての私の経験則

☆いじめかどうか迷う時(私は一切迷わないが・・・)、「いじり」なのか「遊び」なのか「いじめなのか」

基準は、自分がそうされている親と考えて、その親がその光景を見たら、悲しくなるかどうか、そう考えるとわかる。

・・・現実に行っている方の子どもに、そう聞いて「私が彼のお母さんだったら、絶対いやだな」と説教すると納得します。

子どもたちは、どれが遊びでどれがいじめなのか、判断できずにいる。

中学生でも高校生でも、いじめをされている子どもさえ、いじめと思っていない時もある。

だからこそ、それがいじめかどうかは、本人たちに聞いても意味がない。

大人が見ておかしい、人権の観点からも、社会的に見ても、変だなと思ったら、そう教えるべき。

あくまで自分たちが正しいし、まちがっていないと主張するなら、最近では刑事事件になるほど、いじめは社会的に許されない問題になっているのだと、はっきり告げる。

本人たちが否定し、そうじゃないと言っても、違う遊び方があるだろうと言えはいいだけの話です。

だから、いじめについて具体的な問題が出てきた時に、クラスで話し合わせたりすることは意味が無いし、かえって、まちがいだと思っている。

いじている側と傍観者が、「いじめられる側にも問題がある」と主張するにきまっているから。



また、いじめられている子どもが逆に否定したり、親に言わないでくれとか、相手に注意しないでくれとか、口止めされることもあるし、親御さんから大ごとにしななくてくれと言われることもある。

でも、私は一度もそれを言うとおりにしたことはありません。説得します。なぜか？

それはそのまましておけば、必ずエスカレートする。立ち向かうには一人ではダメだからです。

いじている側も、そのまましておけば、悪いことだと自覚しないで大人になる、それは彼らにも不幸なこと。

だから、「いじている側も将来後悔すると思うから、解決していこう」と、そう説得します。

「仕返しが怖い、先生がいない時にやられる」・・・そう言われる時がある。

そう、いじめられる側が言うのなら、「みんなの目」を作ればいい。

いじめだって、「批判的に見ている人たちがたくさんいる」という状態があれば、みんなの目が怖くて、繰り返すことはできない。

そういう意味で、必要があれば、いじめをしていた子側に「他の先生たちも知っているよ」と言います。これは、大人の目が担任以外にもあることを知らせるため。

クラスの中でも、公にします。

ただし、「いじめがあった」みたいな報告ではなく、具体的に「○○君が○○君にこういうことをされて、嫌なことがあったんだよね」「それは、とても嫌なことでしょう？ 見ている方だって嫌だし、やっている側だって自分がされたら、いやだよ。だからもうしない、見かけたら、止める。あるいは、ちゃんと大人に言う、これを良いクラスにしていくために実行してね」と、伝えます。陰で行っていることを表に出してしまう、そして公の目で止める、これが大人の役目。

そういうクラス的环境を作っておくと、告げ口＝報告が来なくても、定期的にアンケートを取るとちゃんと書く子が出てきます。

「先生に言っても無駄」とだけは思わせてはいけません。

独りで防げなければ、他の先生の助けも得て、防ぐこと。



次は いじめの兆候として、参考に……。

いじめの兆候	いじめになっている
まわりの子がその子と距離を少し取っている。近づかない あからさまではないが不自然(並ぶ時、机など) →	いっしょになるのを嫌がる(班や席、ペア、グループ) え～～って言って嫌そうな顔をする。
その子が発言したり何かすると笑い声が さざめくようにおこる。顔を見合う。 →	その子のまねをして笑う、何人かの子がその子が何 かすると顔を見合わせる。変なあだ名を隠れてつけて いる。クラスの中で変なあだ名で呼ぶ。
作業をしようとする、いつも同じ子がいつも同じ作業をし ている、役割が固定している。 →	そうじをさぼって押し付けられる子が決まっている。 嫌な仕事を押し付けられている子どもがいる。
遊んでいるグループの中なのに いつもちよっかいを出される子が決まっている その子の物(特に多いのが筆箱や文房具)が → いつもいじられる。 遊び仲間で、いつも役割が決まっている	いつもその子の物が無くなったりこわれたりする。 ちよつとした怪我がおきる まわりの子たちは、遊んでいるので悪くないと言う。 その子が頻繁にお腹がいたいと言い出す。 学校に来たくないと言い出す

いじめの遠因(小学校高学年～中高生)

子どもたちは、「集団になじもう、同調しよう」と、小学校高学年から中学校になればなるほど、自分をセーブして友達に合わせようと懸命に努力する。

まず家族よりも親よりも、友だち優先になる。

社会性を身に着ける大人への第一歩なのだが、それは「今までわがままを言ってきた自分」を変えること。

思春期を過ぎて、大人になれば、「社会に適応し自制すること」が、無意識でできるようになるのだが、まだその途中の彼らにとっては、自分を制御しようとしない(ように見える)クラスメートが、不満なのだ。

「なぜ、自分は我慢しているのに、彼は、彼女は、我慢しないのか、同調できないのか？」と思ってしまう。その不満と、「自分がいつも我慢している」というストレスが重なって、その理不尽さを相手にぶつけていく。だから、自分は正しいと思ってしまう。(いじめを正当化する時の理由が多くはこれだったりする)

そのストレスが強ければ強いほど、弱者を見つけて発散しようとしている。(でも自分たちは気づいていない) 人間的ではないとわかっていながら、「誰かが泣いたり、嫌な顔をしたりするのを“おもしろい”」と感じたり、傍観したりするのもこのせい。

だからまず、クラスでも生活の中でも、我慢は必要最小限にして、クラスは楽しく明るい・そして誰もが安心できる場所にする。そして、ストレスのたまった子たちの悩みを聞いてあげて解決するのが大切。

解決への方法と考え方

☆ **すぐに問題は解決する。その日のうちに、その週のうちに、それが解決の早道。**

電話も、家庭訪問も、面倒くさがらずに、どんどんやるべし。顔を合わせ、話をすればするほどコミュニケーションは伝わる。

ただし、一人ではやらずに、いろいろな人にアドバイスを受けて、自分の行動を決める。

自分が親だったら、あとで知らされたいやだろと思うことは、子どもに「親に言わないで」と言われても、



伝えることが必要。密約にならないよう、子どもにも「それを知らせるのが私の仕事なの」と言っておいて。

☆例 鼻くそ事件、つば事件、消しゴムの上に落ちた物を食べた事件、下痢してしまった事件、……

特に女子は、この時期は潔癖症になる。「汚いことは悪いことだ」という善悪判断をしがち。

(先生たちの中にも、その子がそういうことをするのだから、まわりから疎まれてしかたがないと言う先生もいますが、潔癖症ではない私は、先生ぐらゐは汚いことに、少しは平気になってほしいと思う。)

だから、基本的に、そんなことは大したことはない、人間はそういう生き物。した方の人間が悪いわけではないし、汚いわけではないと、私は強調します。

「みんな小さい頃は、おむつを当てていて、私も何度も娘のうんちのおむつを替えてきたよ。

受け持った子たちの中には、うんちのついたパンツを振り回した子もいたけど、

私はまわりの目に負けずに、かわいがったし、普通に汚いからやめなさいと怒ったよ。

具合が悪くて吐いちゃった子もいたけど、その子を汚いと思ったら、その子は悲しいでしょう？

鼻くそなことだけけど、あなたたちだって、小さい頃鼻くそ食べていたかもしれないよ。なぜって、私の娘も食べていたから、……。やめさせようと何度もしたけど、塩辛くておいしいんだ！！と言って、なかなかやめなかった。

でも、今は、やってないから大丈夫。みんな通る道だよ。」

女子に「え～ちがうよ」と言われたら「そうかな？」と軽く流してけむに巻きます。



ただし、相手には、注意はします。気をつけなさいね(中学生だからこそ)

そして、汚い時には、汚いから手をふきな、鼻をかみなさいと紙を渡します。先生が不潔そうにその子を扱うと、まわりもまねをする。だから普通に、お母さんのように。

☆例 誰かさんが誰かさんを好き？事件……

女の子がよくやる遊び。クラスのおとなしい女の子がクラスの異端児の男の子を好きらしいと噂を流す……。

言われた本人から訴えがあつて……(アンケートに書いていた)これは、明らかな嫌がらせ遊び。

噂をしているという子どもたちに聞くと、必ず「噂を聞いた、私が発信者ではない、……」というのが言い訳。

そして、うわさにされた女の子に「○○君が好きなの？」と、わざわざ聞きに行く子たちもいる。

まず、噂のもとをたどっていく。そして、ただ聞いただけだから、という言い訳をする子には、「じゃあ、あなたは○○君が好きらしいけど？と言われることはうれしいの？聞かれた女の子も嫌だろうし、話題にされた男子にも失礼じゃないの？」と聞けば明らか。

噂をたどれば、発信者はわかってくる。最後に楽しんでいることを確認して、二度としないように本人の前で約束させる。噂の広がり具合や程度によって、謝り方は軽くの場合もあるし、クラスをまきこむ場合もある。

☆いじめを予防するのはどうするか？

*** いじめられそうな子どもたちは、先生の身近な役職に付かせる。**

「いじめられそうな子ども」というのはレッテルを張るという意味ではなく、先生が気付かないとだめだから、そういう表現をしているが、次のような特徴の子どもたちを指しています。

- * 同調できない(これは決して悪いことではないが、日本では特に同調圧力が強いので)、
- * 目立つ(自分では気づかないで、他の子と違いが際立っている子ども)

- * 作業や行動がゆっくり、いっしょのスピードについて来れない(学校ではとにかく早く早く…!)
- * 自己表現ができない(自分の気持ちを言えない、黙ってしまう、言えないので暴力に走る)
- * 整理整頓が苦手(無くしたり捜したり誰かの手が必要だから、おくれを取る)

こういう子どもたちのことを、まわりの子どもたちからすると邪魔に感じたりしてしまうから、…。あるいは、先生自身が迷惑を周りにかけていると思ってしまうから、いじめが起こる原因にもなる。クラスのメンバーはそこにいるだけで、十分クラスのメンバーとして価値があると、認める教室にならなければ、いつまでもいじめは絶え間なく起こります。

(いろいろな欠点があっても「家族は家族」というように、欠点があっても「クラスメートはクラスメート」と認める。排除しない)

そういう子どもたちを毎日ある小さな仕事、みんなの前で連絡するような仕事に着かせると、変化にも気づくし、先生のすぐそばにいと子どもたちも思うので、孤立をさせたり、手を出すことはなかなかできない。

毎日よく声をかけ、話しかけて、少しユーモアでからかって、無理やりでも笑顔にさせる。

たとえば、帰りの会司会、連絡係、配り係、
黒板に曜日を書く係、メダカ係、お手伝い係…。



* いじめそうな子どもたちは、かわいがって、かまってあげて、話を聞いてあげる。

逆にいじめそうな子どもたちは、わんぱく少年少女たち。部活や遊びに十分満足している時は、いじめにかまっている暇などない。

いじめる方の子たちは、何かのストレスをいじめという形で発散させたくてそういう行動をする。ジャイアンも、勉強ができないというコンプレックスと、先生にいつも怒られるというストレスからのび太君をいじている。ジャイアンが活躍する場面では絶対にいじめないでしょう？勉強が苦手だったり、家庭が複雑な状況だったり、…そういう子どもたちはいつもいます。

そして、かまわれない症候群は、いじめる子、いじめられてる子、傍観者たち、全員そうです。

だから、いろいろな意味で、エネルギーがあって有り余っている子たちには、楽しく笑顔になるようなかまい方をする。近づいてきた時は話を聞くチャンス。おとなしい時は何かあった時。不満げな時には、ちゃんと残らせて、話を十分聞く。

そして、私に対する不満であろうと、それを率直に話をしたことをほめてあげる。

理解していなかったことを、真摯に私から「ごめんなさい」と謝る。



* 世論を喚起する。ギャング団の方が楽しいしおもしろいから教師一人では負ける…

クラスの最近、困っているところ、おかしいと思うところ、直した方がいいと思うところを書いてもらった。「授業中大声で話をする人がいて困る」「チャイム着席をしないで、チャイムが鳴ってからロッカーのところに行って授業の準備をする人がいて、集中できない」「友達のまねをして笑っている男の子と女の子がいた。嫌な気持ちになった」

時々、こういうふうなクラスの世論を聞いてみないと、クラスの雰囲気は流されて、子どもたちがよく言う「チョーンに乗ってる」子たち(つまり我が物顔で楽しむ子たち)がクラスの雰囲気を、どんどん自分たちの物にしてしまっている場合がある。

特にものすごく悪いことをしているわけではないけれど、他の子たちにしてみれば何となく居心地の悪さを感じたり、「笑われるのではないかと気にするようになったり…。

そういう場合には、まわりの子たちが遠慮して、チョーンに乗っている子たちが楽しんでいるのを傍観して笑う、あるいは苦笑するしかないときらめてしまう…

そんなクラスに変化していく。

だから、チョーンに乗りすぎている子どもたちには、ブレーキをかける必要がある。

その時必要なのは世論。それも一人二人では彼らは苦しめないし、名前を出せば標的になるので、具体的に「これこれこういう意見(例:休み時間に騒ぎすぎじゃないとか、人をまねして笑っているのがとても気分が悪いとか…)の人が、4人位いたんだけど…」と全体の場で訴える。

アンケートの意見は、読み上げるだけで、「それは正しい意見だなあ」と子どもたち自身がそう思えるので、お互いに気をつけなければという雰囲気になる。これだけでOK。

話し合いをすれば、もっと良いクラスにするにはどうしたらいいか。短期間での実現可能な目標をみんなで考えること。話し合いは、前向きに。

「クラスがさらに良くない状態になった場合、どうするか？」などを何十分も、クラスで話し合うことは危険。子どもたちから「言っても聞いてくれない」「○○君はいつもそうだ」…などと標的のように人物の名前が出て来たり、集中攻撃が始まってしまう。

すると、今度はどう罰を与えれば、みんなの言うことを聞くか…という話になる。

罰は話しあわない、エスカレートするから。ペナルティを与えるのは権力者である先生だけです。



* 大人の社会を教える。授業に対しては、敬意を払うべし。

小学生低学年は、楽しければはしゃぎ、悲しければ泣いて、自分の感情を表に出し、人に伝えることが大事。でも、中学生で同じことをやっていれば、幼さとして見られて理解されない。

でも、一方で、中学生たちも、その生き生きしたエネルギーを、ホントはどんどん自由に表現したい。体中から発散させたい。

だから、場を見極めることが中学生にとっては大事になる。

その守らなければならない砦が、「授業」。これが公の場。

特に、自分の授業ではなく、他の先生の時に、暴れたり、おしゃべりしたり、無視したり、…そういう場合私たちは仲間の先生のことを「力不足」と内心思っ「しょうがないな」と考えがち。

しかし、学校の中で、誰かが尊重されないということは、学校のルールが崩壊しているということ。

無政府状態ということです。そのつけはいずれ、クラスに返り、自分に返り、学年・学校にも回る。

中国で文化大革命の時に「造反有理」という言葉が使われて、すべての権威をぶち壊そうとした。

結果的に歴史的遺物は破壊され、老人が昔の過去を問われ引きずり出されて暴力を受けた。

誰も、決して敬意を払われないのはダメ。子どもたちも、大人たちも…。

だから、授業の妨害をしたり、先生を愚弄したり、…そういうことがあった場合は、

相手の先生に謝りに行かせる。集団でやった場合は、一人一人個人で行かせました。



子どもも先生も弱肉強食の学校の状態は、私個人では二度と味わいたくない苦い思い出なのです。